

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00055

研究課題名（和文）「嶺南心学」研究の基盤構築 明代心学史像の再検討のために

研究課題名（英文）Basic Research of the "Lingnan Xin Xue" - Reexamining the historical image of Ming Dynasty Xin Xue.

研究代表者

鶴成 久章 (Tsurunari, Hisaaki)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20294845

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：湛若水とその門人を中心とする「嶺南心学」の思想家の活動の実態と思想の特色の解明を通じて、明代に「陽明心学」と拮抗する勢力を有した「嶺南心学」に関して、明代心学史の発展においていかなる役割を果たしたのかについて新たな指摘を行うことができた。中でも、『泉翁大全集』『甘泉先生統編大全』『湛若水全集』等を活用することによって、これまで具体的な研究成果が乏しかった晩年の湛若水の思想活動に関して新たな知見を獲得することができた点、並びに、「白沙学」の明代思想史上における評価の問題、及び「甘泉学」の心学思想としての独自性の問題について、従来の研究とは異なる評価を提示できた点等が特に重要であると考えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明代心学思想史の研究においては、「陽明心学」を中心に位置づける一方で、それと拮抗する勢力を有した心学思想として「嶺南心学」（白沙学派、甘泉学派）を高く評価する『明儒学案』の思想史観の影響が今なお極めて強固である。しかしながら、本研究によって、「嶺南心学」にそもそも「陽明心学」と並立し得るほど独自の思想的な特色があったと言えるのか、さらには、「嶺南心学」が明代心学思想史に深い影響を与えたとする見方については、改めて検証し直す必要があるのではないかという点について問題提起できたと考える。本研究によって得られた成果は、旧来の明代心学史像を新たな視点から再検討していくための研究基盤になると考えている。

研究成果の概要（英文）：Through the elucidation of the activities and characteristics of thought of the philosophers of the "Lingnan School of Mind" centered around Zhan Ruoshui (Ganquan), it was possible to provide new insights into the role played by the "Lingnan School of Mind" in the development of Ming Dynasty Confucianism, which rivaled the "Yangming School of Mind". Particularly, by utilizing works such as the "Quanwengdaquanji", "Ganquanxianshengxubiandaquan", and "Zhanruoshuiquanji", it was possible to gain numerous new insights into the late-life philosophical activities of Zhan Ruoshui, which had previously lacked concrete research results. Especially, offering a different evaluation of the "Baisha School" in Ming Dynasty Confucian history and addressing the uniqueness of the "Ganquan School" as a "School of Mind" thought are considered important achievements distinct from previous research.

研究分野：中国哲学

キーワード：心学 嶺南心学 陽明心学 白沙学 甘泉学 湛若水

1. 研究開始当初の背景

近年(2010年代以降)飛躍的に研究が進んできたのが陽明後学(陽明学派・姚江学派)の研究であった。それに対して、本研究課題の申請時に研究が遅れていたのが、白沙後学(白沙学派・江門学派)の内の再伝以降の思想家、並びに湛若水(甘泉学)及び甘泉後学(甘泉学派・西樵学派)の研究であった。中でも、湛若水の晩年の交友と思想活動、並びに甘泉学派の形成過程を扱った研究は実に寥寥たる有様であった。その主な原因は、研究の基礎資料である『泉翁大全集』全85巻、『甘泉先生続編大全』全33巻が稀覯本で、かつ校点整理・刊行が遅れたため、王守仁の逝去後に約30年もの長きにわたり旺盛な思想活動を行った湛若水の晩年の思想活動の実態解明がほとんど手つかずであったからである。そのような背景もあって、当時の学界においては、「嶺南心学」への評価は『明儒学案』の指摘をほとんどそのまま踏襲するだけであった。だが、明代思想史をより深く掘り下げて考察していくためには、「嶺南心学」の位置づけに改めて注目してみる必要があると考えたのが、本研究課題申請の動機であった。

2. 研究の目的

明代を代表する心学思想家である王守仁は、陳献章の心学について二三の断片的なものを除き、批判も肯定も含め具体的に言及していない。このことは、『明儒学案』の編者である黄宗羲が疑問を提示して以来、いまだに解明が進んでいない謎である。他方、王守仁は陳献章門下の湛若水と親密な交流関係を保ちながらも、湛若水の心学思想に対しては、終生、非常に厳しい批判を行った。これらの事実は、王守仁が、陳献章から湛若水へと伝承された「嶺南心学」の系譜を軽視していたからではなく、むしろ逆に自らの心学と対峙するだけの影響力を有する心学思想として強く警戒していた可能性を示しているのではないかと当初は推測した。こういった問題意識から、「陽明心学」、さらには、明代の心学思想をより深く掘り下げて考察するためには、「嶺南心学」の特色を明らかにすることが必須であると考えた。そこで、本研究では、明代の嶺南地域の思想家群を幅広く調査して、「嶺南心学」の実態とその独自性を探り出すことを通して、「陽明心学」を一旦相対化して、旧来の明代心学史像を新たな視点から再検討するための基盤を整えることを、当初の研究目的とした。

3. 研究の方法

明代の「嶺南心学」の思想家群を調べ上げ、姓名、字号、生卒年、科挙及第年、出身地域、師承関係、著作等の一覧を作成する基礎作業を行ったうえで、さらに、明代思想史上特に注目すべき重要な著作を残した代表的思想家の言説を分析して、その心学思想の特色について考察を進めていく研究方法を採った。

まず、2020年度には、上述の基礎作業の一環として、『明儒学案』の白沙学派(陳献章の学統)、甘泉学派(湛若水の学統)から、嶺南地域出身の学者を抽出し、その著作から思想的な繋がりのある嶺南の学者をリストアップする作業を行った。また、併せて『[万曆]新会県志』巻六「白沙弟子」、及び阮榕齡編『白沙門人考』の内容分析も行った。さらには、『泉翁大全集』全85巻(台湾中央研究院中国文哲研究所、2017)、『甘泉先生続編大全』全33巻(同)の内容を詳しく調査することで、湛若水の別集に登場する門人の整理を進めた。

2021年度も、前年度の作業を継続するかたちで主に嶺南地域の地方志を使用して「嶺南心学」の思想家の師承関係・交流関係の整理を行った。また、2021年度は、『湛若水全集』全22冊(上海古籍出版社、2020)を新たに活用することが可能になり、湛若水の著作に記録された門人の整理を一層進展させることができた。

2022年度中に、予定していた地方志の分析作業、及び『泉翁大全集』『甘泉先生続編大全』『湛若水全集』の内容分析をほぼ全て終えることができた。

そして、計画の最終年度となる2023年度は、前年度までの研究によって既にリストアップが終わった思想家について、個人の詩文集、あるいは何らかの思想的な著作を残している思想家についてはその著作の伝存状況と所蔵機関を調査し、入手できた資料から順番にその心学思想の分析に取りかかった。その際には、前年度までの研究によって得られたデータをもとに、個々の思想家の「嶺南心学」の思想家としての位置づけを明確にした上で、それぞれの思想家の言説から窺える「陽明心学」との顕著な相違点、「嶺南心学」としての独自性に留意しながら考察を行った。

4. 研究成果

本研究計画の推進によって、「嶺南心学」の特色に関する考察を独自の観点から深めることができた。陳献章、湛若水を中心とする嶺南の心学者たちの明代思想史上の位置付けの再検証、陽明後学の思想家と湛若水との思想的交流関係の分析を通して得られた知見を総合的に考察した結果、王守仁逝去後に約三十年も講学活動に従事することができた湛若水は、晩年の思想活動においては、師説（白沙学）の喧伝と自説（「随処体認天理」）の墨守といった「守り」の姿勢が顕著で、独自の心学思想の深化や学説の発展はほとんど見られないことが明らかとなった点は、とりわけ重要であると思われる。

また、本研究を進めていく過程で、湛若水が、嘉靖三年（1524）に南京国子監祭酒となり、その後、南京の吏部、礼部、兵部の尚書を歴任して同十九年（1540）に致仕するまでの間に弟子入りした門人の中には、王守仁（陽明）あるいは陽明後学の思想家たちとの交流関係が深く、一概に甘泉学派の思想家とはみなし難い人物が少なくないことも明らかになった。

上述のような事実関係を精細に整理・分析することにより、2023年10月に、「湛若水と陽明後学 陽明学との「大同」に活路を求めた甘泉学」を発表した。この論文により、王守仁逝去後の晩年の湛若水は、師説（白沙学）の宣伝活動に従事する一方で、自説（随処体認天理）と王守仁の学説（致良知）は同じ（大同）だという主張を繰り返し、自身の門弟と王守仁の後学たちに対して、王・湛の学の相違をめぐる論争は止めて、両学の「大同」を「黙識」するように説き続けていた事実を具体的に明らかにすることができたと考える。但し、紙数の関係で、上記論文の中に発表することができなかつた問題も多く、それらを改めて整理して「嶺南心学」の実態解明をさらに深めることに繋がる論文を現在も作成中である。その中では、明代心学思想の先駆者とされる陳献章の思想、及び彼の高弟である湛若水を中心とする嶺南の心学者たちの明代思想史上の位置付けについて、黄宗羲の『明儒学案』が言及していない事実を取り上げて検証することを構想している。研究期間終了までに完成させ投稿することができなかつたのは遺憾であるが、今年度（2024年度）内に学術論文のかたちで発表したいと考えている。

他方、本研究によって湛若水の思想活動と明嘉靖年間以降の書院の興隆との関係についても、新たな知見が得られたことも重要である。その一部は、「韓夢鵬『新安理学先覚会言』訳注 其の三」の中で関連資料の訳注として発表した。さらに、廬山の白鹿洞書院と陳献章との関係、そして、南京の新泉精舎、溧陽の嘉義書院、韶州の明経書院における「嶺南心学」の思想家の活動についても、従来の研究には見られなかつた新たな知見を多数得ることができた。これらの成果の一部は、『明代儒教思想の研究 陽明学・科举・書院』の中で公開した。この明代の書院講学活動に関わる成果は、今後より対象を拡大して研究を進展させていく予定である。

最後に附言すれば、四年間の研究計画期間中、予定していた「嶺南心学」研究の拠点である広東省や広西省・海南省をはじめ中国内の現地資料調査、並びに国外の機関における文献資料調査が全く実施できず、当初の研究計画に大幅な変更を加えることを余儀なくされた。しかしながら、研究計画期間の後半には、国内の研究機関・図書館等の調査を重点的に実施し、ウェブ上に新たに公開されたデジタルアーカイブを活用する等の代替手段を講じることにより、最終的な研究成果としては、「嶺南心学」研究において新たな知見を少なからず提示することができたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 陽明後学会語研究会	4. 巻 29
2. 論文標題 韓夢鵬『新安理学先覚会言』訳注 其の三	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 白山中国学	6. 最初と最後の頁 41-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴成久章	4. 巻 第32号
2. 論文標題 王畿の「白鹿洞統講」について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 陽明学	6. 最初と最後の頁 1~28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴成久章	4. 巻 62
2. 論文標題 「陽明先生小像」について 王守仁の「神」を伝えた蔡世新	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福岡教育大学国語科研究論集	6. 最初と最後の頁 33-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鶴成久章	4. 巻 63
2. 論文標題 『論語』の教材研究のために 「仁」の朱子学的解釈について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福岡教育大学国語科研究論集	6. 最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鶴成久章	4. 巻 56
2. 論文標題 湛若水と陽明後学 陽明学との「大同」に活路を求めた甘泉学	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東洋古典學研究	6. 最初と最後の頁 31-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 鶴成久章
2. 発表標題 明代の白鹿洞書院と陽明学派 王畿の「白鹿洞統講」を中心に
3. 学会等名 陽明学研究センター主催公開シンポジウム「陽明後学研究の現在」(招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 鶴成久章	4. 発行年 2023年
2. 出版社 研文出版	5. 総ページ数 784
3. 書名 明代儒教思想の研究 陽明学・科举・書院	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------